
ね、一緒にいよう

空野みち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ね、一緒にいよう

【Nコード】

N6030M

【作者名】

空野みち

【あらすじ】

妖精が見えるって言う不思議少年チハ君ときなこさんの徒然なる日々。

ハニージンジャーエール(前書き)

私の見ているものとあなたが見ているものはどれ位違うのでしょうか。

寄り添う距離が狭まれば、私にもあなたが見る世界が少しは見える気がするのです。

ハニージンジャーエール

あらら不思議ねハニージンジャーエール
とろりと甘くて最後はからい

それはまるで飴と鞭

人生のようだねジンジャー

甘い夢をハニー

はじけてジンジャー

ハニーはとろけるよ

ハニージンジャーエールは夢の味

「なあに？ それ」

「ハニージンジャーエールの歌」

妖精が歌うんだって、

それから一緒に歌おうって強請るんだって。

だから、チハ君はめんどくさそうな仏頂面して歌う。

もつと楽しそうに歌えばいいのに。

「ふふ。面白いのね」

カラリとストローを回す。グラスの底でジンジャーエールの泡がプ
チプチはじけた。

「面白いのは、きなこさんだよ」

チハ君はじっと私の様子を眺めて言う。
首を傾げるその仕草が年相応の子供に見えて私はまた、ふふっと笑った。

「私が面白いの？妖精さんに勝てるかしら」

「きなこさんは、大人なのに妖精を信じるの？」

疑心暗鬼なチハ君。

どうでもいいって顔の後ろに、まだ消えない希望がちらちらしてる。
ねえ、何度も失望させられたのに、そう聞かずに居られないのよね。

「さあ。分からないけど」

チハ君は、とたんに顔を歪める。

悲しいような怒ってるような、失望した顔。

チハ君。ねえ最後まで聞いて。

「目に見えないものは分からないけど、チハ君の言うことは信じ
し、正しいと思う」

チハ君。

私の恋人だった人と姉さんの忘れ形見。

ねえ、姉さん

私、何度も失望した。

だって貴女、私に何の言い訳もせずじまいだもの。
何が本当に嘘なのか、狂いそうで仕方なかった。
だけど、小さな小さなチハ君が言うの。

妖精しか話し相手が居なくなっちゃったって。

ねえ。どうしてかな。チハ君は姉さんたちの裏切りの証なのに、私、抱きしめずには居られなかった。

「私は、チハ君を通して妖精さんを見るわ」

だから、一緒に暮らそう。私に妖精さんを見せてよチハ君。チハ君が、溢れそうなくらい目を真ん丸に見開いてる。

「きなこさんの方が、やっぱり面白い」

泣かないでチハ君。

ねえ。今度は一緒に歌おうよ。ハニージンジャーエールの歌。

あらら不思議ねハニージンジャーエール

とろりと甘くて最後はからい

それはまるで飴と鞭

人生のようだねジンジャー

甘い夢をハニー

はじけてジンジャー

ハニーはとろけるよ

ハニージンジャーエールは夢の味

レイニー

きなこさんは、変な人だ。

朝起きて雨が降っているのに、「洗濯物ほそう」ってウキウキしながら洗濯機を回す。

「チハくんチハくん手伝って」て、まだ眠い僕の手を引っ張って、部屋中に張り巡らせた麻紐に丁寧に洗濯物を吊るす。

あつという間に、部屋は洗濯物だらけの空間になって、たっぷり入れた柔軟剤の香りが柔らかく部屋中を満たした。

それから2人、部屋の片隅でクッションにうもれながら、下からその光景をぼんやり眺めていると、キナコさんが満足そうにため息をつく。

「ふふ。秘密基地みたいだねえ」

変なの。雨なのに朝から張り切って洗濯して言う台詞がこれ。変なの。

「ねえねえチハくん。雨の日は、妖精さんは大丈夫かなあ」

きなこさんは、こうやって度々僕に聞く。

そんな時、僕は戸惑う。 小学校の同級生は僕を嘘つきとか、宇宙人だって笑った。

お母さんもお父さんも、僕が妖精と話をするといつも悲しい顔をした。

なのに、きなこさんは違うんだ。

僕を通して妖精を見るって言う。

「大丈夫だよ。葉っぱの下にいたり、部屋の中に入って来たり…」

僕にとって、小さいその生き物たちがいる光景は当たり前だった。妖精って呼ぶのが正しいのかは分からないけど、お母さんが、きつと僕にしか見えない妖精なのねって言ってたから、人間が言うところの彼らは妖精らしい。

僕にしか見えない。僕にしか見えなかったんだ。

何だか、胸がぎゅってなって、僕は隣に寝そべるキナコさんにすりよった。

「んん？チハくん？まだ眠いの？」

きなこさんは、優しく僕の髪をすく。

その感触を失いたくなくて、僕はわざと、ぐずるように眠たい振りをした。

僕はね、生まれた時わかったんだよ。

きっと僕は満月の夜の妖精の取り換え子なんだって。

だから、同級生より妖精と話してた方が自然だったし、お母さんとお父さんは好きだったけど、僕が無表情なのが怖いとか、精神病院へ連れて行こうって話を妖精伝いに聞いちゃうと、やっぱり僕は彼らを心から信頼することが出来なかった。

だから彼らが事故で死んでしまった時、僕はとうとう妖精に戻るんだって思ってたんだ。

なのに、何でかな。

きなこさんが僕を抱きしめて泣いた時、可笑しなことに、僕は初めて泣いた。

熱くて、よく分からない感情の波が僕を人間に留めてしまったのかな。

僕は、本当はちょっとがっかりしてしまっただけど、こうしてきなこさんに触れるたび、まあいいか。て思うのも本当。

僕は人間より、妖精よりきなこさんが好きみたい。

きなこさんは変な人。

僕が好きになった初めての人間。

シナモンティー

シナモンティーが好きだ。濃いめに入れたアッサムティーにシナモンの枝をクルリと泳がす。

すると、ふんわりとしたシナモン特有の香りが紅茶に溶け出して、何とも言えない幸福な紅茶の出来上がり。

「これで薔薇の形の角砂糖2つだと完璧なんだけど」

シナモンの枝をくるくる泳がせながらそう呟けば、目の前で私と同じ動作をしているチハ君が首を傾げた。

「薔薇の形の角砂糖？」

「あれ、知らない？」

「角砂糖を？」

「そんな歌があるの。私も小さい頃聞いた歌だからうろ覚えなんだけど」

薔薇の形の角砂糖と言うフレーズにやけに惹かれた。そんな美しい形の角砂糖が溶け出した紅茶は、どんなに美味しいことだろう、と子供心にもドキドキしながらその歌を聞いたのを覚えている。

「どんな形をしてたって、結局は角砂糖でしょ？」

チハ君てば、妖精が見えるって言う素敵な力があるくせ、こうやって言うことなす事、結構現実的なんだよねえ。

何処か大人びた面差しで、紅茶を口に運ぶチハ君を眺めながら私は苦笑する。

「気持ち次第で、砂糖だって味が変わるかも」

「甘いものは甘いよ」

そんな憎まれ口をたたきながら、チハ君は何の変哲も無い角砂糖を1つ紅茶に落とす。

そして、もう1つ取ったと思えば、それをそっとテーブルの端に置いた。

「？」

そんな行動に首を傾げていると、じゃあさ、ってチハ君が今度は私に角砂糖を1つ差し出した。

促されるまま、角砂糖をティーカップで受けとる。

「なあに？」

「今、とっておきのおまじないをかけたから、ただの角砂糖じゃないよ」

ちょっと照れるみたいにそう言ったチハ君。

私は何だか嬉しくなってチハくんの魔法の砂糖入りのシナモンティーを、いそいそと一口。

「どんな味？」

「幸福の味」

問われるままにそう言えば、納得したのかしてないのかわからない表情で、ふうん。とチハ君が呟く。

「ねえ。どんなおまじないなの？」

わくわくしながら尋ねれば、チハ君が、つとテーブルの端を指さした。

「あれ？角砂糖無くなちゃってる」

ついさっきチハ君が置いていた角砂糖が影も形もない。

「妖精がもっていったよ」

チハ君が事も無げにそう言い、紅茶を一口。

「ええっ。じゃあさじゃあさっ。チハ君の紅茶の中のと、私の紅茶の中のと、妖精さんが持って行った角砂糖っておそろいってことでしょ？」

すごいすごい。どんな角砂糖より貴重だよってはいでたら、呆れたようにチハくんが一言。

「元を正せば、きなこさんが買ってきたお徳用パックの角砂糖」

またそうやって夢を壊すようなこと。って頬を膨らませたけど、やっぱり今日のシナモンティーは今まで飲んだどの紅茶より幸福の味がする。

チハ君と私を眺めながら、小さな彼らが甘い砂糖を頬張るのを想像すると、たまらなく不思議で、たまらなく幸せな気持ちになった。

カプリブルー

涙の海に悲しみの魚

彼女が泣く

今夜も泣く

きなこの涙はカプリブルー

夜、歌うような妖精の声に起こされた。

曰く、きなこさんがまた泣いているらしい。

僕は、ゆっくりとベットから抜け出して、きなこさんがいるであろう台所へと向かった。

ひんやりとした、台所にきなこさんの背中を見つけて、僕は気付かれない距離でそっと佇む。

きなこさんは、夜中時々こうして泣く。

僕の寝室にと宛がわれた部屋から一番遠いこの台所で、嘔吐くみたいに小さく声をもらしながらきなこさんは泣く。

妖精からそのことを伝えられる度、僕はすぐにでもきなこさんの元に駆け寄りたいのだけど、台所の小さなその背中を見てしまうと、どうしても僕は動けなくなってしまう。

きなこさんが、涙をこぼす度、台所が薄くカプリブルーに染まってい

く。その色はとても綺麗で、儚くて、僕は何時もその色に立ち竦んでしま

う。「ハルトさんっ姉さんっ・・・っ」

きなこさんが泣きながら呼ぶ名前はいつもこの二人。

僕のお父さんとお母さん。

僕の名前は千春って言うのだけど、お父さんの春都から由来する春を、きなこさんは何時も見ないふりをする。

きっと僕の中にお父さんの欠片を見るのが凄く怖いんだ。

チハ君って呼ばれるの僕は凄く好きだけどね。

きなこさんとお父さんが昔どんな関係だったかなんて知らないけど、とっても大きな傷をきなこさんに残したのは確かで。きっと僕もその傷に少なからず関与しているのだろう。

きなこさんと一緒に暮らすようになって最初の頃、ぼんやりと妖精を見ていた時、きなこさんは僕に尋ねた。

『お父さんとお母さんが居なくなっちゃって寂しい？』

そう言ったきなこさんの方がよっぽど寂しそうな顔をしていたから、僕は咄嗟に『妖精がいるから大丈夫』って言っちゃたんだ。

きなこさんがまた少し悲しそうな顔をして僕を撫でた後になって、僕は言葉を間違えたんだって気付いた。

『きなこさんがいるから大丈夫』って言えば良かったって、すごく後悔した。

何時も妖精とばかり喋っていたせいかな。貴女を慰める言葉が咄嗟に出てこない。

きなこさんは、何時でも僕を気遣う言葉を持っているのに。

どうして僕には出来ないのだろう。

どうして僕は子供なんだろう。

きなこさんにとって僕は守るべき対象であって、僕の頼りない身体じゃすり寄ることは出来ても抱きしめることは出来やしない。

きなこさん。

きなこさん笑ってよ。

何時もみたいに何でも無いことで楽しそうに笑って。

僕はどうしたってきなこさんのカプリブルーの海に入れないんだよ。
悲しみの魚が泳ぐその場所は、きなこさんの美しい悲しみだけを受け入れるから。

僕はどうしても、そんな夜だけは、彼女に近づくことさえ、出来ないんだ。

悲しみ丸ごと取り除くなんて無茶言わないから。
せめてその悲しみのブルーに僕を受け入れて。

どうか、一人で泣かないで。

アプリコットジャム

この時期になると私はあんずを沢山買って、殆どをジャム変えてしまふ。

ジャムは日持ちするから、たくさんアプリコットジャムは瓶詰めして保存するの。

「スコーンにも合うよ」

今日のおやつのスコーンにも花を添えるアプリコットジャム。綺麗なオレンジが甘酸っぱく味に花を咲かして、とっても美味しい。チハ君にも勧めると最初何のジャムだろうといった様子だったが、一口食べて目をぱちぱちさせた。

「あ、あんずのジャム」

「食べたことあった？」

チハ君は、両手にスコーンを持ったまま、じっと私を見る。その様子が何だか小動物みたいでちょっと笑ってしまった。でも、どうして固まっちゃてるんだろうね。

「あれれ、どうしたのかな。口に合わなかった？」

ううんって首を横に振って、もう一口スコーンを頬張ると、チハ君は小さく呟く。

「懐かしくって」

「ん？」

「・・・お父さんがよく食べてた」

あ。

そうか。

しまった。

アプリコットジャムは彼の大好物。

忘れていた訳ではないけれど。

忘れたふりをすれば平気だと思った。

油断、していたんだと思う。

チハ君は、びっくりするくらい両親の話をしないから。

不意に蘇ってくる記憶に動揺してしまいそうになって、咄嗟に笑顔で隠そうとした。

「きなこさん」

真剣なチハ君の顔。

私には見えないものが見えるその不思議な瞳で、真直ぐに射抜いてくる。

「隠さないで。きなこさん」

だめ。

見ないで。

チハ君にこんな暗く淀んだ感情を吐露するわけにはいけない。

お願いチハ君見ないで。

まだあなたのお父さんに余情があるなんて。

何て情けなくて浅ましい女なんだろう。

「きなこさん。きなこさんの悲しみはねとっても綺麗な色だよ」

チハ君やめて。

おねがい。

「薄くて淡い海の色だよ」

そんな風に言わないで。

私の悲しみが、そんな綺麗な色を帯びるはずが無いから。

チハ君という時だけ私は少女のように汚れない純粹さを手に入れた気持ちになる。

その時だけは、全ての醜い感情から解放されるよう。けれど。

一人暗い寝室のベットに潜ると、闇が私にのし掛かってくる。知らないふりをするな、と幾度も私を責めるの。

春都と私は恋人同士だった。

顎のラインが繊細で、困ったとき少し首を傾げるのが彼の癖。私は彼の顎から首にかけてのラインをとっても愛していた。

衝撃の告白の時、彼は何時ものように小首を傾げて言ったわ。

『ごめん子供ができた』って。

春都の隣に当然のように座る人は私の姉だった。

黙って俯いて、私の顔を見もしなかったの。

自分が哀れでしかたなくって、私は絶えきれずに二人の前から立ち

去った。

ただ惨めで、憎しみばかり心に募った。

憎くて、許せなくて死んでしまえばいいって何度も何度も思った。

再会は、二人のお葬式。

雨で車がスリップしたんだって、カーブを曲がりきれなかったって。なんて・・・なんてあっけなく。

最悪の再会に私は立ち尽くした。

私の憎しみは宙ぶらりんのまま行き場を無くしてしまった。

ねえ。待ってよ。

私にまだ何も弁解してないじゃない。

何年かかっても説得して謝ってみせて。

そしたら。

そしたら「もういいよ」っていつか笑うから。

こんな風に終わらせるなんて、あんまりじゃない。

そんな時、大人たちの不気味なモノクロ世界のなかにチハ君を見つけたの。

一人でうずくまって、どうしたのかなって近付けば、小さな声で見えない何かとお話してた。

『ねえ、何してるの?』

『：妖精と話してた。：お父さんとお母さんがいなくなったから僕はもう妖精としか話さないんだ』

それが始まり。

衝動的に抱きしめて、名前を尋ねた。

チハル

千春

春都と姉さんの宝物。

姉さんは茜。

そして、私の名前は『千代子』。

『千代子はきな粉が好きねえ、きなこちゃんね。きなこちゃん』
お姉ちゃん。

どうして姉さん。どうして？

千に隠された意味をどうか教えてよ。

それとも私の考えすぎ？

運命と呼ぶには単純すぎるかな。

だけどその時、この子を守らなければと、使命のように直感したの。

決壊した涙腺。

一つ二つと涙を零す私に、チハ君はそっと近づいて涙を拭ってくれる。

座り込んで泣きじゃくる私の頭を立ち上がったままのチハ君が小さな身体で精一杯抱きしめてくる。

おかしいな、守るはずの私が逆に慰めるように抱きしめられて。
おかしいな。

けれど、その包み込むぬくもりに抗えるはずもなく、そっと頬をすり寄せた。

いつもとまるで正反対の私とチハ君。

「やっと近づけた」

チハ君も私の髪に頬をすり寄せて、なんだか満足そうな溜息をついて言った。

もうきつと私は。

この子なしで生きてなどいけない。

裏切られた気持ちが強すぎて死んでしまえなんて、幾度も思った。けど。ねえ、それくらいに二人ともとても大切だったから。本当に愛していたからなの。

ねえ。

春都さん、ねえさん。

チハ君を私の宝物にしてもいい？

私がチハ君をもらってもいいかな？

せんのはるに誓います。

この腕の中のぬくもりをどうか私に守らせてください。

憎しみはまだ心の中に燦るけれど、チハ君との幸せを前に私はそれを許そうとしている。

ごめんね。あの時苦しんだ私、たくさん泣いた私。

憎しみよ、もうどうか私を責めないで。

何の弁解もなかったけれど、彼らは私に『千春』を残してくれた。

だから、「もういいよ」って笑って暮らそう。

どうかもうなにも責めずに、ただこの子と幸せの一步を。

アプリコットジャムを食べる度、きつとあなたを思い出す。

けれどその苦い悲しみが、毎年毎年甘酸っぱく、色付くように変わって行きますように。

リグレット

寂寥の想い
夢と堕ちて

静寂へ

ひとひらの波紋

広がるはリグレット

心揺るがすりグレット

耳元で煩わしくも歌を歌われて、僕は眉を顰める。

妖精とは良くも悪くも単純な生きもので、人間のように奥に秘めた感情が存在しない。

つまり何時だって明け透けなんだ。

隠し事も、暗い感情も、嘘も、彼らには無関係。

ただ彼らは人間の奥に秘められた感情というものに、やたらと敏感で興味を持ちたがる。

彼らには無いものだから、だろうか。

人間に纏わり付いては時に楽しげに、時に静かに、時に激しく歌いあげる。

喜怒哀楽。

彼らはそれを見つけ出しては歌いあげる。

「チハくん。どうしてそんな傷をつくったのか、いい加減教えて」

「・・・」

僕の目の前に、悲しいような、怒っているような複雑な顔のきなこさん。

僕の腫れた頬を手当てしてくれながら、痛ましそうに顔を歪める。そんな表情はさせたくなかったけれど、僕は何も言えずに口を閉ざしたまま。

広がるはリグレット

心揺るがすりグレット

また、妖精が歌う。

ああ、煩わしいな。

僕の感情を汲み取らないで欲しいのに。

彼らは僕にさえも、容赦無いらしい。

僕の感情が揺れるのが、そんなに楽しいのかな。

ちょっと溜息をついたとき、ピンポンと来客を告げるベル音。

インターフォンを取るきなこさん。

相手の言葉に、一瞬声を固くさせて、ちらりと僕を見る。

「はい。今開けますから」

玄関に向かう彼女の背中を見て、今度は深い溜息がもれた。

「ですから！おたくの子が先にうちの子に手を出したんです！」

玄関から響く声に、僕の予感が外れていなかったことを知る。そっと、きなこさんの隣に歩み寄るとクラスメイトの男の子とその母親が立っていた。

クラスメイト（名前は何だったか忘れたけれど）は、一瞬僕をチラッと見てすぐ気まずそうに目を背むけた。

「純一の顔に傷跡でも残ったらどうしてくれるんです!？」

「ちよっと落ち着いてください佐山さん。まず、当人たちの言葉を聞きませんか？」

そうそう。佐山純一だ。

佐山の母親と、きなこさんのやりとりで、やっと思い出す。

学校でいつも、宇宙人とからかってくるのは佐山だった。

僕にとって、そんなことはどうでも良かったので、これまでどんなことを言われようと僕は平気だった。

無視すればするほど、佐山が僕にいちいちよっかいをかけてくるのが若干、煩わしかったけど。

取り合おうなんて思わなかったんだ。

裏も表もない妖精と心乱れぬ会話を楽しんだ方がずっと、僕にとっては建設的だ。

人間は、難しい。

色んな感情を心に隠して、取り繕う気になどなれなかった。反抗心さえ僕に芽生えはしなかったんだ。

なのに。

佐山のあの言葉だけは、僕は無視することは出来なかった。

『おい！親無し宇宙人！お前を引き取ったっていうおばさんも、どうせお前みたいなキチガイなんだろ』

何を言われたって、揺らぎもしない僕の心が、ザワリと波打って。冷静に考えるより早く、佐山を殴ってしまっていたんだ。

「ちょっと！何とか言ったらどうなの！」

佐山が黙って立ち竦んでいる横で、佐山の母親の怒りばかりがどんどん激しさを増していく。

黙って聞いている、細いきなこさんの肩を見あげて、僕は僕の馬鹿な行動にどうしようもなく後悔していた。

広がるはリグレット

心揺るがすリグレット

「これだから！親のいない子は！」

とどめとばかりに佐山の母親がそう言った瞬間、目に見えてきなこさんの醸し出す感情がスツと冷えた。

静かな怒りのブルー。

「佐山さん。それは余りにくちさがない。貴女が今冷静でいられないのは分かりますが、本人を目の前に言う言葉か否かくらい、理解できるでしょう？」

貴女は大人なのだから。そう静かに言い切ったきなこさん。

口調も、表情も淡泊なのに、その瞳だけは苛烈に燃えて、佐山さんを据える。

その視線に、声を荒げていた佐山さんも言葉を失った。

いつものほんわりなきなこさんしか知らない僕は、佐山さんに言われたことも忘れて、ちよつと驚いてしまった。

見惚れるぐらいの静かな怒りだ。

「先ほどから申し上げておりますが、これは当人たちの問題でしょう？先だっては、彼らの意見を聞くべきではありませんか。それと、一つ反論するようですけれど・・・」

と、きなこさんが僕の方を見る。

あ。

冷たかったその瞳が、痛ましそうに歪んだ。

その理由を察して、僕はきなこさんに手当された頬に手を当てた。

「傷つけられて憤っているのは、こちらも同じなのですよ」

きなこさんの言葉に、ついには何も言えなくなった佐山さん。

僕は、何でか分からないけれど、凄く、不思議なほど心満たされていた。

掌の下、ガーゼに覆われた傷はまだズキズキしてるのに。

変だな。

ちよつとおかしなくらい、心臓がうるさい。

だからだろうか、僕は僕でも予想しなかった行動に出たんだ。

すつと、佐山さんの隣で俯いている佐山に近づく。

僕が目の前に来て、佐山はびくっと身体を震わせた。
何時も強気な佐山はどこに行ったんだか。

「先に手を出したのは僕だし、殴ったのは佐山じゃないんだ」

そう。佐山は僕に殴られたあと、ぽかんと固まってしまつて、僕に殴りかかったのは佐山の舎弟みたいな奴らだったんだ。

だから。

「こっち。殴っても良いよ」

殴られていない反対側の頬を差し出すように向ける。
痛いのは嫌いだけど。

いいんだ。

きなこさんにまた、手当してもらおうから。

「お、まえ」

するとどうしたことか、佐山は僕に手をあげることなく、わなわなと口を震わせた。

そして、何故かぼろぼろと泣き出したんだ。

「おれのがっ。ずつつ・・・ずつと！お前に酷いことしてんのに！・・・なんでっなんだっ」

どうしたことだろう。

何時もの強気なガキ大将な佐山がぼろぼろ泣いてる。
僕はよく分からなくて、首を傾げた。

「佐山君は、チハ君に悪いことをしたって思うんだね？チハ君に殴られるくらいのことをした？殴られても納得できた？」

きなこさんが、僕らの視線に合わせるように屈んで、やさしく佐山に尋ねた。

よかった。もういつも通りのきなこさんだ。

佐山は、首がもげるんじゃないかって思うくらいに首を上下に振って泣いている。

「チハ君は？」

今度は、僕にやさしく聞くきなこさん。

広がるはリグレット

心揺るがすりグレット

僕は。

「佐山が言ったこと。あの言葉は許せなかった。だけど・・・暴力をふるうべきじゃなかった」

だから。

僕は、ぐしぐし泣く佐山を真っ直ぐ見た。

「ごめんね。佐山」

「う、うえええええ。おれっぐっおれが、ごめん。ずっとごめんな。ごえんなはい」

ごえんなはい・・・。

佐山の余りの有様に、僕はちょっと笑ってしまった。

そしたら、ずっと泣いていたくせに、佐山がピタリと泣き止んだんだ。

その目を一杯に見開いて、何に驚いてるんだか？

微笑ましげに佐山を見ていたきなこさんが、すっと立ち上がって啞然としている佐山さんに向けてニツコリした。

「当人同士で解決したようですし、これ以上大人があれこれ言うことも無いでしょう」

寂寥の想い
夢と堕ちて

静寂へ
ひとひらの波紋

広がるはりグレット
心揺るがすりグレット

残ったのなあに？
残したのなあに？

「ふー。よかったねえ大事にならなくて」

二人が去って、きなこさんがほのぼのと言う。
不思議だ、このほんわりな人が、あんな風に変貌するなんて。

「きなこさんって変」

きなこさんは変。

僕を変にする。

聞き取ったきなこさんが、「言ったなー」と僕の脇をくすぐった。
きなこさんのくすぐり攻撃にめっぼう弱い僕。

「つつやめて、よ」

「あ」

その拍子に手に持っていたカードがパラりと落ちて、きなこさんの動きが止まる。

解放された僕は、それをそっと拾い上げた。

帰り際、何故か佐山に渡された食玩のおまけカード。

カードに描かれた、薄い羽を持つその姿が存外気に入った僕は、よく分からないけど有難く貰っておいた。

「ふふ。妖精さんみたいだね」

そのカードを覗き込んで、きなこさんが笑う。

「佐山くん。きっとチハくんが羨ましかったんだね」

佐山が僕を？なんで？

疑問は残るけれど、

そのカードの絵は、なんだか悪くなくて。

僕はそれをポケットに入れて、そっとその上から掌で暖めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6030m/>

ね、一緒にいよう

2010年12月6日11時40分発行